

アンチモニー産業にみる 大都市複合型産業集積化による 再生産可能性

飯吉 佑有（経済学部4年）

指導教員：渡邊幸男名誉教授

東京では、首都としての機能の集約が進む一方で、戦前からの工業集積地としての基盤と戦後の多様な産業の新規立地により、複合的な生産空間が形成されてきた。そのなかで、以前東京の重要産業の一つであった雑貨産業などの地場産業的業種は東京という大都市のなかで存在感を失い、埋没している。しかしながら、そうした量的には統計に表れることのない産業への需要が途絶えず、産業自体も淘汰されることなく再生産を遂げているのもまた、大都市である東京ならではのことである。

本稿は、こうした大都市に埋没している産業の再生産の論理を紐解くことで、東京という大都市において多様な需要が存在し、それに対応するだけの多様な産業が存在するとともに再生産を可能にしている現状を分析することを目的とする。分析にあたっては、産地型産業集積研究と都市型産業集積に関する議論への回帰とともに、東京で再生産を遂げている産業の一例として、東京都の城東地区に立地するアンチモニー産業を挙げ、産業内の垂直的連携組織として成立した葛飾アンチモニー会の会員に対する聞き取り調査や事例研究を行う。集積に関する既存研究とアンチモニー産業から示唆される再生産の論理をもとに、大都市としての東京における産業の再生産可能性の構造を「大都市複合型産業集積化」と名付け、本稿の最後に論じる。

アンチモニー産業の再生産を可能にした外部環境の要因には、東京という大都市において存在した複合的な残存者利益と、巨大な工業集積地としての基盤産業の安定性と多様性が挙げられる。また、こうした供給側と需要側の双性の複合性をつなげ、最適化する役割を担う「メーカー」が存在していることは、産業の構造変化を助け、再生産に導いた。こうした再生産の論理から示唆される大都市複合型産業集積化は、①大都市における産業集積であるという点、②複合型の集積であるということの二面性、③市場とサプライヤーを仲介する企業が存在し、双性の複合性をコーディネートしている点、④集積の再生産が

形態の変化に伴って可能になった点の四点により特徴づけられる。この再生産の理論は、大都市型産地型産業集積や都市型産業集積の再生産といった既存の議論の枠にとどまらない東京特有の産業集積の再生産可能性を証明するものであり、その点が東京という複合的な産業環境を解明する一つの手がかりとして本稿が寄与するところである。